

---

# VRMMOのある日常

zeharen

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

VRMMOのある日常

### 【Nコード】

N2433BA

### 【作者名】

zeharen

### 【あらすじ】

俺、中学一年生、VRMMO始めました。

### 注意とか

\*ノリと酔いだけで書いたので適当さ120%。

\*パロディとか、むしろそのままとかある。

\*不定期更新

\*実はMMOやったことない、こんなゲーム有ればなあ妄想で書いた。モンハンもずっとソロだった。

\*感想、アドバイスとか歓迎、誤字脱字指摘も同様。しかし直したり変更したりは確約できません。

\*変な改行はメモ帳のでやっているため。言われたらそっちも対応したいです。

これらを理解してなお読みたいとお思になる勇猛な方は、少しでも楽しんでくれたさればうれしいです。

# 1話 誕生日とプレゼントと中学生（前書き）

導入部です。



そして縦横無尽にあたりを転げまわる。

「アーハハハハッ！！ イヒヒヒッ！」

まだ回る。

「ダーハハハハハッイテッ！」

ガッン！ 軽快な音を立てて石に激突。  
頭に衝撃が走り、まだ転がる。

ちなみにこれは痛みで悶絶したためだ。

『ポーン！ スキル：【回転】を取得しました』

軽妙な電子音と共に無機質な女性の音声が脳内に響く。

「いたたた・・・回転？」

どうにか痛みから復活し、頭をすりながら指をぱちんと鳴らす。  
すると目の前には自然な風景とは不釣り合いな電子画面が呼び出され文字や数字が羅列される。

【Name: シュウ:lv4】

【Skill】

棒術: 21

隠密: 17

回 転 : 1

【 Stamina 】

100 / 100

【 Arts 】

・ 三段付き

・ 大円

【 Ability 】

・ 沈黙

【 Potential 】

L I F      6 6 / 6 8

S T R      3 6

A G I      4 0

D E X      3 8

D U R      3 2

M A G      2 0

【 Your Title 】

Nothing

【 Equipment 】

頭 : 旅立ちの耳飾り [ DEF : 3 ] [ WEI : 1 ]

胴 : 旅立ちの衣 [ DEF : 8 ] [ WEI : 2 ]

腕 : 旅立ちの手袋 [ DEF : 6 ] [ WEI : 1 ]

腰 : 旅立ちの腰巻 [ DEF : 5 ] [ WEI : 1 ]

足 : 旅立ちの下履き [ DEF : 7 ] [ WEI : 2 ]

【Weapon】

E：鉄製の物干し竿「ATK：4」「WEI：5」

【Weight】

88 / 300

「ふむ」

装備とか能力がしょぼいのは仕方がない、そもそも序盤だ。

と見ると見るのはそこじゃなくて【Skill】から【回転】の項目を選らんど。

指で直接タッチして操作。

すると今までの画面が消え別の画面に切り替わる。

【回転】

回ることに関する技術。回って回って回るが飛べない。

・・・何だこの説明。

試しに別のも選んでみる。

【棒術】

棒を操る技術。棒はいいぞ棒は！ なんとって武器が格安。

・・・どういう売り込みの仕方だ。

というかそれしか利点無いかよこれ。

【隠密】

姿を隠へいする技術。気になるあの子に迫れ！

「いやそれは推奨しちゃいかんだろー！」

思わず声に出して突っ込み。

しかしそれに反応するものはなく、目の前には湖が静かに波を立てていた。

とりあえずここで一言。

中道<sup>なかみち</sup>修<sup>おさむ</sup> 中学一年、VRMMO始めました。

\* \* \* \* \*

\* \* \*

齢を重ねることは劇的である。

特に小学校から中学校へや中学校から高校へなど上級学校に進学する際には環境の変化はその先に人生において大きな意味合いを持つことが多い。

それはなぜかと言われれば出会いが増えるからだ。

学校内であつた人の括りが地域、そしてもっと遠くからの人など今まで会つたことが無い人種と出会える。

それは万人の不安煽り、期待を膨らませる。

俺こと、中道 修にとつてもそれは同じだ。

しかし俺はその日、小学校と中学校のいつたいどつちに帰属しているのか謎の春休みにもっとちがつた人種と出会うためのツールを手に入れた。

『ハッピーバースデー！！ 我が愛しの甥っ子よ！ 中学生生活を楽しみにしているかい？』

4月4日、その日は一年に一度の俺の誕生日だった。

楽しみしてなかったかといえは嘘になる。

共働きで家を空けがちの両親もその日だけはいつも家において祝つてくれるし、いつもは自分の手料理だがその日だけは外食や、出前など自分の手を煩わせることもないからだ。

しかし不安が無かつたとか言えばそんなことない。

理由はいま目の前の立体映像電話内で豪快に笑う叔父にある。

『おいおい、どうした？ 我が甥？ 引き攣つた笑いが出てるぞ？

さては姉さんの料理を食つたな』



心の中で絶叫するが表面上は愛想笑いを浮かべたままだ。ここで下手を打てばもつとひどいことになるのは明白。とりあえずは父さんが物を取ってくるのを待って……

「修一、ちよつと手伝ってくれー。一人じゃ持てん」

そんなにでかいもの送ってきたかよ!?

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

俺の叔父である春上 正志は【スプリング】というベンチャー企業  
の若手社長だ。

特に新出産業であるVRヴァーチャルリアリティ機器事業をほぼ国内寡占状態。

雑誌とかでは新世代の傑物とか呼ばれているらしい。

叔父の年収だけで正直、我が家は十年優に遊んで暮らせる。

そんな彼の楽しみが甥である俺いじり。

イベントごとに俺を脅かそうとあの手この手尽くすので正直、うれしいのだが毎度有難迷惑であることが多い。

だってペットとか言って、アナコンダをプレゼントされてどうしろと。

将来の為とか言って許嫁作ってきたとかどうしろと。

お前のために専用アニメ会社つくったからどうしろと。

勿論すべて丁重に処理した。

アナコンダは動物園へ、許嫁はそもそも俺が叔父さんの息子とか偽ってたらしいので無しってことに（ちなみに俺は相手に会っていない相手も俺も小4の時なのだ、ばかげているとしか言いようがない）、アニメ会社はネットで適当に意見調査して適当な作品を作らせた後は放置している。今では立派に会社としてやっていているらしい。ともかくやることなすことめっちゃくちゃ。

当たり前だが今回の誕生日プレゼントにしても良い予感なんて微塵もない。

「でけえ……」

運んできた第一の感想はそれだ。  
人1人分くらいある。

そして大きさに比例して重い、二人で持っても相当だ。

「叔父さん……なんだこれ？」

ようやく居間まで運んできた後、映像の叔父に尋ねる。  
彼は悪戯ぼっく笑うと

『開けてっらん』

それだけ呟く。

正直開けたくねえ。

とはいえ送ってもらった手前そうしないわけにもいかないし、何よ



手を動かしても浮かんでくる不安を掻き消しながら梱包をすべて取り払ったそこには

「VR機？」

『そうVR機だ！』

俺の疑問を快く肯定し、叫ぶ叔父さん。  
「っーか声がでかいな。」

『しかも最新式、名前は『アーヴァロン』だ！省エネかつコンパクト！それでいて高スペックという我が社至高の新製品さ存分に夢の世界を楽しめるぞ？』

映像なの叔父さんが凄いドヤ顔で見ってくる。

一方の俺は思ったよりまともなので安堵を……？

「なんかまだ入っている？」

よく見れば奥の方に何か小さいものが見える。  
小さいと言ってもVR機に比べればだ。  
手に取ってみてみるとそれは

「ワールド・オンライン？」

ここ数年で広まったNDナノ・ディスクのパッケージ。  
見た感じだとVRゲームみたいだけど……。

「もしかしてこれVRMMOってやつ？」

Massively Multiuser Online、これは多数のユーザーが一つの空間を共有することを指す。

転じてオンラインゲームのことを指し、特にVR機登場以降はVRMMOという完全に違った世界観で本物のような生活を送れることもあり、老若男女に愛されている。

仕事を定年退職した人の中には隠居の代わりにプレイしている人もいるくらいだ。

ちなみに当の本人たちからすればそうしているのは老人らしくないらしい。

正直、俺たちのような老人は家でゲームをしているのが多いという印象が強い世代にすればよくわからない感覚だ。

ちなみに彼らからすればBDフルレインディスクの200倍近く容量を誇るNDも化け物らしい。

『そうVRMMOだ。発売日が三日後の新作だぞ？ しかも我が社で全面バックアップしている』

叔父さんは意気揚々と声を上げ、胸を張る。

つか発売日前のとかいいののか。

というかそれ以前に

「俺VRMMOとかプレイしたことないんだけど」

興味が無いわけでは無いがどうしても時間を食ってしまうという性質上、家事一切を取り仕切る身としてはやれない。

というかそこまではしたいわけでは無い。

小学生時代はまわりでクラスメイトが話しているのを聞いたことがあるが、時間〓強さであるそうだった物に時間を割いてまでやるつもりはなかった。

それ以前にファンタジー世界とか、荒涼とした世界で他人とかモンスターとかと殺しあうのに楽しさを覚えられそうもない。

『何！？ 姉さんも義兄さんもVRMMO反対派か！？ 教育ペアレンツなのか！？』

VRMMOを完全禁止できている親は少ない。

そもそもが親世代である彼ら事態がゲーム世代であって、それを進化させたVR系のゲームなど親子でプレイなどよく聞く話だ。

大っぴらに推奨はしていないが、黙って見過ごすとかあまりに勉強に支障をきたすなら制限する程度だ。

「いや僕はそんなことしていないけど、学生時代はMMOにはまっただし」

「私も別に。MMORPG時代は『近接治療師』とかいわれたものだったわ」

両親ともに肯定。

というか母さんは一体何の職業を選択してたんだそれ？

『ふむ。そういえば姉さんに私のギルドを姉弟喧嘩の腹いせに叩き潰されたな』

母さん！？

『当時の最大派閥だったんだがな・・・』

かーあーさーんッ!?

思わず母の方を見るがその年齢を感じさせない若々しい姿が妙に恐ろしい。

父さんの方を見れば「そっぴや僕のやってたMMOにも似たような事件が・・・あれ母さんだったのか・・・」とか妙に納得してた。その事実を納得できさせるってアンタ達の交際時代ってどんなだよ。両親のなれ初めに少々頭を抱えなくなったがそれは置いておいて。

「と、ともかく俺自身にあまり興味が無いんだ。飯とか洗濯とかしないとイケないしゲームにできる時間なんてあまり無いんだ」

『一時間もかい?』

「いやいろいろ削って三時間くらいは確保できるかもだけど、平日の一日三時間じゃね、時間〓強さみたいだし」

小学校時代のクラスメイトでも強くてもてはやされている奴は一日六時間くらいやっていたらしい。

しかもそれでも上位の連中には届かなくて、そいつらは一日十時間以上やっている廃ゲーマー。

ゲームには楽しみ方がいろいろあるとはいえ強くならず向上心も少ない奴はゲームの邪魔になるだけだろう。

『三時間もあれば平気さ。そのゲームシステムには時間加速が入っているからね』

「時間加速?」

『そうそのゲーム内の時間の24時間は、現実世界の一時間という

わけさ』

「へえ」

確かにニユースでもそういった技術が開発されたことを発表していた。

たしかにそれなら時間が取れない人間でもじっくりゲームができるだろう。  
しかし

「結局、時間をかけて強くなるのは十時間とかやっている奴じゃないか？」

結局それに変わりはない。

むしろ実質時間の差が長くなるだけだ。

『大丈夫。そのゲームは健康上の理由を考え、8時間ログインしていると強制的にログアウトされてその後、6時間はログインできないんだ。同様理由で連続ログイン時間・2時間はログアウト後ログインできない。だから危惧するほどの差を出ないさ』

映像内の叔父さんが笑う。

それでも俺は迷う、別にVRMMOを毛嫌いしているわけではないけど。

のめり込んで両親に迷惑をかけたくないのだ。  
無意識のうちの左右の両親に視線を向ける。

「ぼくは別に修がわがまま言ってくれるくらいの方がいいさ。 正直、あまりに大人だよお前は」

父さんはそういつて頭をなでる。  
さすがに今年から中学生の身としては少々照れくさい。

「私もね。だってあなたまだ家にあまり友達呼んだことないじゃない。この際年齢差はいいからもつといるんな人と友達になってもいいのよ」

母さんは笑顔で告げる。  
ぐつと心に来た。

これが感動なのか、それとも友人の少なさを指摘されたことからきているのかは不明だけど。

『そうさ、我が甥よ。ゲーム内でしかできない体験をしてきなさい。  
【全てを世界は受け入れる】それがそのゲームコンセプトだ』

叔父さんのダメ押し。

ここまで言われてもNO言える人間じゃないさ、俺は。

「分かった。じゃあ俺やってみる」

中学一年直前、13歳の誕生日、俺はVRMMOを始める決心をした。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

\*

\*

『そういえばお前の元許嫁もするらしいぞ、それ。会えるといいな

』！

叔父エ・・・、やる気が一気に失せたよ、なぜか。



## 1話 誕生日とプレゼントと中学生（後書き）

VRMMOとか全然してない、タイトル詐欺ってますね。

今回は電腦世界へプラグインです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2433ba/>

---

VRMMOのある日常

2012年1月6日02時48分発行